

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 8 日現在

機関番号：10103

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25420652

研究課題名(和文)ベトナム・ハノイ36通り地区の景観および居住空間の保存すべき特質

研究課題名(英文)Characteristics that should be Conserved of Townscape and Living Space in The Ancient Quarter of Hanoi, Vietnam

研究代表者

内海 佐和子(UTSUMI, Sawako)

克蘭工業大学・工学(系)研究科(研究院)・准教授

研究者番号：10398711

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：ベトナムの歴史的町並みであるハノイ36通り地区の外観に関しては、1)業種の観光産業化が一段落したこと、2)商業集積の進行が景観に影響をおよぼしていることを明らかにした。居住空間に関しては、3)集合住宅化した町家においては、増改築の可能性の差により、同じ町家内においても居住環境格差を引き起こしていることを明らかにした。また、4)当地区の居住者は、当地区らしさを町並みの構成要素である町家に対してではなく、歴史的建造物や昔ながらの業種が残っている通りに対して感じていることを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：At The Ancient Quarter of Hanoi, Vietnam, this study has grasped the following: 1) Changes to the tourism industry has settled down. 2) Progress of commercial accumulation is affecting the townscape. 3) By the possibility of renovation, there is a disparity in the living environment. 4) This district residents are feeling this Ancient Quarter likeness against historic buildings and old industries in some streets.

研究分野：建築計画・都市計画

キーワード：観光地化 景観変容 町並み保存 リビングヘリテージ 伝統的町並み 居住空間 らしさ 国際協力

1. 研究開始当初の背景

本研究は、研究課題名「開発著しいハノイ都市圏における近郊農村・下町・新住宅地の町づくり研究」(基盤研究(A)(1)、平成15~18年度、研究代表者:友田博通)に端緒を得ている。

この研究課題には、本研究課題の研究分担者である福川が研究分担者として、また、内海が研究協力者として参加し、ハノイ旧市街(通称:ハノイ36通り地区)のうち、国が定める第1級保存地区内およびその周辺の通りにおいて、実測調査に基づく居住環境の実態把握、歴史に関する聞き取り調査、景観の復元作業などを行った。そして、それらの調査から、一定の仮説の構築および、歴史的町家の新たな発見といった成果を得た。

この研究課題では、近郊農村、下町、新住宅地といった性格の異なる3地区を研究対象としていた。しかし、下町、すなわちハノイ36通り地区だけでも研究内容が膨大となったため、対象を絞り、より深く研究を進展させる必要性が生じた。

そこで、研究チームを再編成し、研究課題名「ベトナムの歴史都市・ハノイ36町の空間構成とその保全に関する研究」(基盤研究(B)(海外)、平成19~21年度、研究代表者:福川裕一、研究分担者:内海佐和子)に取り組んだ。

この研究課題においては、ハノイ市およびベトナム側研究者(ハノイ建設大学)との研究グループの構築、当地の伝統的町家の空間構成の把握と類型化および、発展プロセスの解明といった、具体的成果を挙げることができた。

しかし、同時に、保全と改善の両立を検討した結果、過密居住に起因する無理な増改築が、町並み保存活用、景観整備の妨げになっていることなど、解決すべき今後の課題も明らかになった。また、町並みを構成する町家の外観の変容については、メカニズムの解明には至らず、さらに、その発展としてのデザインコードの策定も残された。

近年のハノイの経済発展は著しく、ハノイ36通り地区は観光地としての位置づけも急上昇している。そのため、町家の建替えおよび、それに起因する景観変容も加速度的に進行しており、当地の保存活用、景観整備を急務としているハノイ市は危機感を募らせているものの、対応が追いついていないのが現状である。

よって、ハノイ市では、当地の保存活用、景観整備に実践的に役立つデザインコードおよび、町家内部の改造ガイドラインの策定を急務としている。

現在、東アジアの歴史的都市には、「中心市街地の保存と居住環境整備」という共通の課題が背景にあり、当地も例に漏れない。よって本研究は、そのための重要事例のひとつとなり得るとも考えた。

2. 研究の目的

前項の「1. 研究開始当初の背景」で述べたとおり、本研究課題のチームは、既に先行した研究を実施していることから、当地の伝統的町家の外観の構成要素および空間構成の把握は済んでいる。

しかし、当地の町家の外観、内部空間共に、変容実態の把握および、変容の背景である改変要因とその結果についての検証がなされていない。そのため、これらが未解決のままでは、今後、町並みの保存活用、景観整備の際の障害となる。

そこで、本研究はこれまでの研究の発展的研究と位置づけ、以下の項目について明らかにすることを目的とする。

(1) 町家の外観について

伝統的要素について、保たれているデザイン、消滅したデザインを明らかにする。

平成15年調査と比較し、景観変容の背景である改変要因とその結果についての検証を行い、因果関係を明らかにする。

(2) 町家の居住空間について

伝統的町家と改造・改築した町家における空間構成および住まい方との比較から、維持されている空間、消滅した空間、転用されている空間を把握したうえで、現在、住民が必要としている空間構成を明らかにする。

居住空間の改変要因とその結果についての検証を行い、因果関係を明らかにする。

(3) ハノイ36通り地区固有の魅力について

インタビュー調査を基に、住民がなにを伝統的だと思っているのか、また、なにをハノイ36通り地区らしいと感じているのかの検証を行い、ハノイ36通り地区固有の魅力を再認識する。

最終的には、以上を総合し、行政およびベトナム側研究者との協議を加味したうえで報告書を作成し、ベトナム国内での出版を目指す。

3. 研究の方法

(1) 景観の変容実態を把握する調査

ハノイ36通り地区中の第1級保存地区にある通りの中から、伝統的町家が含まれており、かつ開発が進んでいる性格の異なる7本の通り(ハン・ペー通り、ハン・バック通り、ハン・ブオン通り、ハン・ザイ通り、ルオン・ゴック・クイン通り、マー・マイ通り、タ・ヒエン通り)において、前回調査の平成15年と同様、通りに面した町家全軒のファサード写真撮影を行う。同時に、業種の見取り調査も併せて実施する。

(2) 住民が必要としている空間構成を把握する調査

行政の意見も参考に、当地区内において改

造、建て替えを行った改造時期、目的、規模など要素の異なる町家を選出し、家屋実測に加え、住民に対し、住まい方および改造内容、改造ポリシーに関するインタビュー調査を行う。

(3) 「ハノイ 36 通り地区らしさ」を把握する調査

住民に対し、当地区のなにを伝統的だと思っているのか、なにをハノイ 36 通り地区らしいと感じているのかを把握するためのインタビュー調査を行う。

4. 研究成果

まず、年度ごとに経過をまとめる。

(1) 初年度（平成 25 年度）

平成 25 年 7 月にハノイ市において、カウンターパートであるハノイ建設大学の Loan 氏（当時、現ベトナム建築研究所 副所長）、Hoa 氏および、ハノイ 36 通り地区を管轄している市役所の一部局である、ハノイ 36 通り地区保存事務所とキックオフ・ミーティングを行った。

本研究の日越協働による国際研究組織は、本研究の礎となるこれまでの研究（「1. 研究開始当初の背景」を参照）におけるチームと基本的に同じである。そのため、研究目的および研究方法に対するコンセンサスは、既に得られているため、本ミーティングでは本研究課題の概要説明、活動計画の確認を行った。

本ミーティングを受け、同年 9 月に現地において、15 軒の町家に対し、家屋実測調査、住民に対するインタビュー調査を実施した。

また、景観に関しては、第 1 級保存地区にある、ハン・ブオン通り、ハン・ザイ通り、マー・マイ通り、ルオン・ゴック・クイン通り、タ・ヒエン通りにおいて、通りに面した町家全軒のファサード写真撮影および業種の見取り調査を実施した。

(2) 2 年度（平成 26 年度）

以前の調査と併せた採取データを資料とし、平成 26 年 9 月、現地においてワークショップ “Workshop on Conservation of Hanoi 36 Street, 2014”（以下、WS）を実施した。

今回の WS では、提案対象を第 1 級保存地区にあり、且つ調査を行った町家が多く含まれている、ルオン・ゴック・クイン通り、ハン・ザイ通り、ハン・ブオン通り、タ・ヒエン通りに囲まれたブロックとし、ねらいを以下の 3 点とした。

これまでに得た調査データから、当地区の保存すべき特徴を把握したうえで、デザインコードを提案すること

新しい建物を建てる際の具体的なプランおよびデザインを考え、当地区の将来像を提示すること

その提案を実現するためのシステムを提

案すること

これまでも、当地区に対しては、ベトナム国内外の機関から保存活用の提案がなされ、その一部は実施されてきた。しかし、それらは外国を中心とした専門家および行政主導によるものである。しかし、現在のベトナムにおいては、住民参加型 WS の開催は難しいという側面があるため、今回の WS は日本およびベトナムの大学生・大学院生により実施した。

(3) 最終年度（平成 27 年度）

平成 27 年 9 月には、初年度の 7 本の通りに加え、同様に第 1 級保存地区にあるハン・ベー通り、ハン・バック通りにおいて、ファサード写真撮影および、建物用途および商店における取扱商品の見取り調査を実施した。

また、本年度は最終年度であるため、平成 28 年 2 月に、カウンターパートに対し、これまでの調査報告およびデータの共有を行うと同時に、これまでの調査内容および成果をまとめた書籍のベトナム国内での出版に向けた準備に着手した。

次に、課題別の成果をまとめる。

(1) 町家の業種と景観

全体的に業種の変化はみられるものの、これまでと比較すると、観光産業化は落ち着いていた。通りでみると、観光スポットやホテルの多いマー・マイ通りでは業種の観光地化が進行していたが、ハン・バック通りは、一旦、観光産業化した店舗が、通り本来の業種である貴金属店に戻すなど、通りによる業種の変化傾向に違いが現れていた。

この地区の町家の本来の使われ方は、通りに面した 1 階のみが店舗という形式であり、これまではこの形式が比較的残されていた。しかし、本研究課題での調査からは、2 階以上の上層階にも店舗が入るなど、商業集積の進行が把握できた。そのため、町家 1 軒あたりの看板設置数の増加、看板設置場所の上層への拡大などが起こり、商業集積の進行による景観の乱れが起きていた。

また、夜間のみ営業する店舗や夜間も営業する店舗が増加していた。これらの店舗は華美な電飾を使用した看板や装飾を使用しており、これまでには見られなかった景観への影響がみられた。

(2) 町家の外観

改造された町家がほとんどであった。改造の際には利便性が優先され、伝統的デザインを残す、または再生することは意識されていなかった。ごくわずかに伝統的デザインを取り入れた新築事例もみられたが、部分的にモチーフを取り入れたのみで、オーセンティックではない外観となっており、それがかえって景観の質を下げている。

(3) 町家の居住空間

町家の集合住宅化による過密居住は依然として続いており、伝統的空間である中庭が増築によって潰されている事例が多くみられた。さらに、保存対象建物に指定されている町家であっても、増改築は既に非常に進行しており、建替えや3階以上の積み増し部分を有する町家がほとんどであった。

最上階に居住していた世帯は上へ積み増すことにより、居住面積の拡大、水回りの改善を行え、通風採光の確保も可能である。一方、最上階以外の階に居住している世帯が増床する場合は、中庭への張り出しや中二階の増築に限らざるをえず、専用の水回りの確保も容易ではない。中庭を潰した場合には、無窓部屋もできていた。加えて、隣戸も4階、5階と積み増しされると通風採光はさらに厳しいものとなっていた。

また、通りに面した棟の1階を所有していた世帯は、自営で商売を行うほか、テナント貸しなどにより収入を得やすいため、所有部分を収入の手段と考えて居住せず、別の場所に住居を構えている事例がみられた。

その結果、通りに面した棟の1階を所有していた世帯は、増改築ができなくとも、店舗収入を基に近代的住居に居住することができ、最上階に居住していた世帯は上へ積み増すことにより居住環境は改善される。一方、下層階の世帯の居住環境は、それに比して劣悪になっていた。よって、1軒の町家内であっても、居住環境格差を引き起こしていることが明らかになった。

これは、WSにおけるベトナム人学生グループの提案にも共通していた。参加したベトナム人学生たちは、住居の場所の相違に起因する貧富の差を当地区における最大の問題と捉えており、保存活用を契機とする経済格差の是正を主な目的として提案していた。また、過密居住は、36通り地区内だけでは解消できないという認識も有していた。

(4) ハノイ 36 通り地区固有の魅力

居住空間については、居住者からは、ハノイ 36 通り地区らしいと感じている箇所に関する意見はみられなかった。これは、居住者が、伝統的空間構成の町家に居住したことがなく、集合住宅化して以降の町家にしか居住したことがないことに起因していると思われる。また、町家の外観に関しても同様に意見は出ず、むしろ、地区の賑わいや、わずかに残る歴史的建造物、昔ながらの業種が残っている通りなどを 36 通り地区固有の魅力と捉えていた。

当地区の居住環境の悪さは、過密居住に起因していることを行政も認識している。そのため、郊外の新住宅地への移住政策を推進し始めた。その一方、当地区の利便性の良さ、経済活動のしやすさ、または町への愛着から継続居住を希望する居住者も依然として多い。さらには、経済活動を目的とした流入希望者もいるため、人口減少の動きはかなり鈍い。

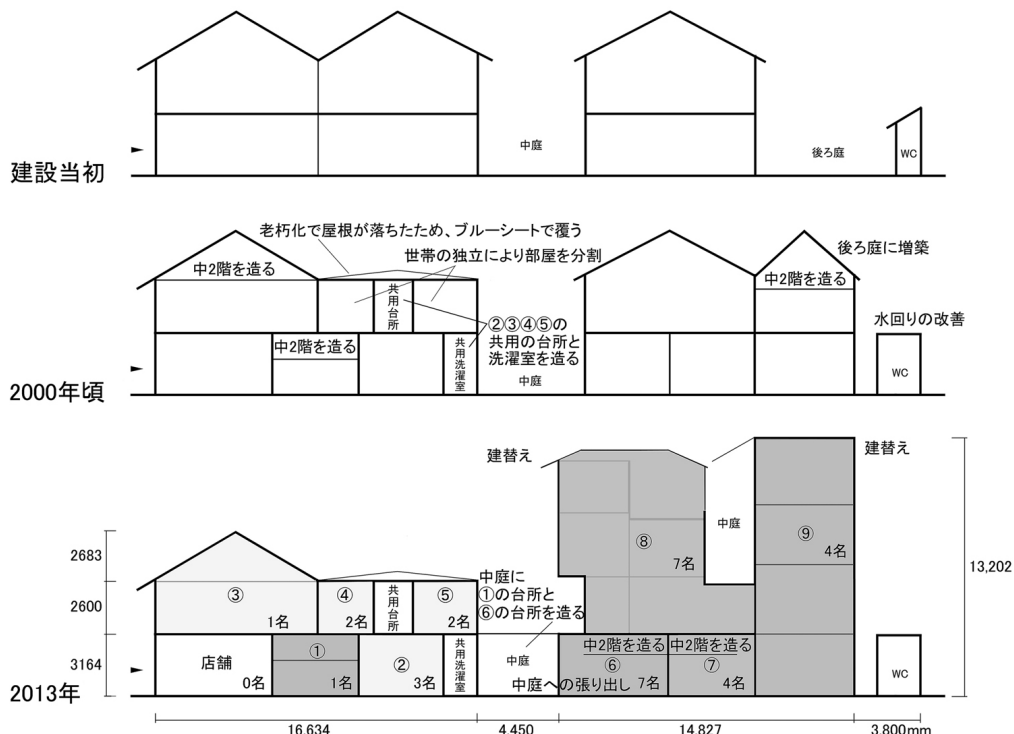


図1 過密居住の町家における増改築の事例

* 図中の人数はその世帯の居住者数

* 建設当初および2000年頃の状況は、調査データを基にした推測により作図

また、住民は当地区の町並みを保存し、観光資源として活用することに対しては、経済効果および町の発展の観点から、賛成意見が多い。しかし、町並み保存よりも前に、居住環境の改善や貧困からの脱却の方に意識が向いており、行政に対しては、そちらの改善を優先してほしいと考えている。

そのため、今後は移住政策の推進と同時に、今後は、建物高さに応じた中庭の確保、最低階高の維持、専用の水回りの確保など居住環境の改善を目的としたルールの策定、運用も行う必要がある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表](計2件)

内海佐和子、福川裕一、「ベトナムにおける住民参加型ワークショップの重要性 - ベトナム・ハノイ 36 通り地区における町並み保存に関する研究 その 8」、日本建築学会大会学術講演梗概集 2015 都市計画、2015 年 9 月、東海大学湘南キャンパス(神奈川県平塚市)

内海佐和子、福川裕一、「過密居住の町家における増改築の現状と課題 - ベトナム・ハノイ 36 通り地区における町並み保存に関する研究 その 7」、日本建築学会大会学術講演梗概集 2014 建築計画、2014 年 9 月、神戸大学(兵庫県神戸市)

6. 研究組織

(1)研究代表者

内海 佐和子 (UTSUMI Sawako)
室蘭工業大学・大学院工学研究科・准教授
研究者番号：10398711

(2)研究分担者

福川 裕一 (FUKUKAWA Yuichi)
千葉大学・大学院工学研究科・名誉教授
研究者番号：60130829

(3)連携研究者

なし

(4)研究協力者

PHAM Thuy Loan
Urban and Architectural Institute,
University of Civil Engineering,
Lecturer

TA Quynh Hoa
Urban and Architectural Institute,
University of Civil Engineering,
Lecturer